本編 18「第一大『犍度』」その 7「61 人の阿羅漢が犀の角のごとく」2020.11.07

〇ヤサ長老を随従沙門として旧実家へ

世尊は早朝に下衣を着け衣鉢を持って具寿ヤサを随従沙門として長者の家に行った。具寿ヤサの母と昔の妻 purāṇadutiyikā が世尊に挨拶して座った。

釈尊は二人のために次第説法を。苦集滅道まで説いた。二人にも遠塵離垢の法眼が生じた virajaṃ vītamalaṃ dhammacakkhuṃ udapādi。「生じるもの（集）はすべて滅びるものである yaṃ kiñci samudayadhammaṃ sabbaṃ taṃ nirodha-dhammaṃ」と。二人はすでに法を見 diṭṭhadhammā、法を得 pattadhammā、法を知り viditadhammā、法に悟入し pariyogāḷhadhammā、疑惑を超え tiṇṇavicikicchā、疑いを離れ vigatakathaṃkathā、無畏を得 vesārajjappattā、師の教えより他に依ることがなくなった aparappaccayā satthu sāsane。**→当初の預流果の言い方のすべて。あるいは aññāta（了知した）。後に、一来、不還と共に四沙門果を説く。**

「在家信女 upāsikā としてお認めください」。三帰依した在家信女の最初。

→このときは「仏」は buddham saraṇam gacchāmi ではなく bhagavantaṃ saraṇaṃ gacchāmi

※ヤサ長老の母がスジャーター夫人かどうかここでは註釈にも出ず。

〇具寿ヤサの四人の友達と五十人の友達

ヤサ長老に四人の在家の友達がいた。Seṭṭhi-anuseṭṭhi-kula 長者（具寿ヤサと同じ）・随長者の息子たち Vimala, Subāhu, Puṇṇaji, Gavampati. 彼らは友ヤサが出家したと聞いて考えた。「これは下劣な oraka 法と律ではあるまい。これは下劣な出家ではあるまい。あの友ヤサがその法と律に出家したのだから」。四人はヤサ長老の処に行き、礼拝した。彼は四人を釈尊の処に連れていき、教導・教誡してくださる ovadatu anusāsatu よう願い出た。

釈尊は次第説法し、苦集滅道まで説いた。四人とも法眼が生じ……出家を願い出た。「来なさい比丘よ」、これが彼らの具足戒。説法と教導により、じきに彼らの心は諸漏より解脱した。世間に阿羅漢は十一人。

Pubba-anupubbaka-kula 旧家・随旧家の息子たち五十人。……

世間に阿羅漢は六十一人。

〇犀の角ではなくサンガにまで広めよ**→アショーカ王のときとの違い**

釈尊が比丘たち（五群比丘とヤサ長老と五十四人）に告げる：

「私は天・人の一切の束縛より解脱した mutta。そなたたちも天・人の一切の

束縛より解脱した→阿羅漢の悟りはまったく同じ。
比丘たちよ、遊行しなさい caratha。遊行は cārikam たくさんの人々の利益のため bahujanahitāya たくさんの人々の安楽のため bahujanasukhāya 世間への憐憫のため lokānukampāya、天・人の義利のため atthāya 利益のため hitāya 安楽のため sukhāya devamanussānaṃである。
Mā ekena dve agamittha 二人が一つになって（一緒に）行くなかれ。
※サンガを作らなかったのではなく、一人ずつでサンガにまで広めよ、の意。↓
・インド文化内ならば一人ずつでもサンガにまでできる。
→「五名以上のサンガが出家を認める」などの戒律がまだなかった。
・アショーカ王時代は異文化のインド外に、最初から五名のサンガとして。
始めもよく半ばもよく終わりもよく ādikalyāṇaṃ majjhekalyāṇaṃ pariyosāna-kalyāṇaṃ、**義利も文言も具足する sātthaṃ savyañjanaṃ**教えを説け。悉皆円満にして悉浄なる梵行を示せ kevalaparipuṇṇaṃ parisuddhaṃ brahmacariyaṃ pakāsetha。
有情の中に塵垢の少ない者あり。彼らはもし法を聞かなければ退堕しよう assavanatā dhammassa parihāyanti。［聞かば］法を理解する者たち dhammassa aññātāro もあろう。**→釈尊の初転法輪のときと同じ**
私はウルヴェーラー（カッサパ三兄弟のいる処）のセーナーニ（軍）村に法を説くために行きます。」

マーラが釈尊に話しかける（いよいよ仏法が始まるので嫌だった）:「沙門よ samaṇa、あなたは天・人の一切の束縛に縛られ、私から脱して mokkhasi いない。」
「解脱しています。死魔よ Antaka、そなたは破られた nihata。」
「虚空を行くがごとき束縛 antalikkhacaro pāso・意 mānasa がある。それによってあなたを捕縛しよう。沙門よ、あなたは私から脱していない。」
「色声香味触は意を楽しませるもの manoramā。これらに対して私の意欲は滅しています ettha me vigato chando。死魔よ、そなたは破られた。」
「世尊は我を知っている。善逝は我を知っている」と苦悩して魔は消えた。

〇三帰依による比丘出家（「来たれ比丘よ」出家と並行）

［六十人の阿羅漢］比丘たちが各地方から出家希望者を釈尊の処に連れてきて出家させてもらっていた。比丘たちも出家希望者たちも疲弊していた。
ある夕刻、黙座から立ち、比丘たちを集め、この由縁によって説法し、「比丘たちよ、私は認めます anujānāmi bhikkhave、今から、あなたたち自身で、各地で出家させ具足戒を授けなさい pabbājetha upasampādetha。やり方は：
まず鬚髪を剃らせ、袈裟衣を着けさせ、上衣を偏袒にさせ、比丘らの足を礼

拝させ、蹲踞させ ukkuṭikaṃ nisīdāpetvā、合掌させ、『仏に帰依し奉る。法に帰依し奉る。僧に帰依し奉る。二度目…、三度目…』と唱えさせる。」**→三帰依出家**

※三帰依による出家は釈尊成道→比丘サンガ成立からすぐ

〇雨期を過ごしてウルヴェーラーへ

世尊は雨期を過ごして vassaṃ vuttho、比丘たちに告げた。

→成道後最初の雨期にはまだ雨安居の制定はされていなかったよう。

三ヶ月間の止住ではなかったので、後に外部から苦情が出た。

「比丘たちよ、私は如理作意し yoniso-manasikārā 如理正勤して yoniso-samma-ppadhānā 最上の解脱を体得し現証した。そなたたちも……現証しなさい」。

→雨期を終え、ふたたび遊行せよの意？

→阿羅漢六十一名の後は、まだ戒律は要らないが、みんながすぐに悟ったわけではない。

マーラがまた同じく唱えてまた同じく敗退。→とにかく邪魔したい。

世尊はバーラーナシーに随意の間住した後、ウルヴェーラーに向けて遊行した。道を離れてある密林に入り、一樹の下に座った。

密林では三十人の賢衆（王族）の友人同士がそれぞれ夫人を連れて遊びに来ていた。一人は独身なので妓女 vesīを連れてきていた。その妓女はみんなが遊び呆けている間にみんなの財物 bhaṇḍa を取って逃げた。友人たちは協力してその女を探して密林を徘徊し、一樹の下に座っている世尊を見た。行って、礼拝して、尋ねた：

「尊師よ、世尊は一人の女を見ませんでしたか？」「しかし、若者たちよ、その女はあなたたちにとっていったい何だというのか？」……わけを話す……。

「さて、若者たちよ、あなたたちにとって、女を探すのと、自分を attānaṃ探すのと、どちらが優れている vara だろうか？」

「自分を探す方です。」「それなら座りなさい。法を説きましょう。」

世尊は彼らに次第説法し、……法眼が生じた……。

「出家させてください。」**「来たれ比丘よ。」**これが彼らの具足戒であった。

※三帰依出家と「来たれ比丘よ」出家が併存している。

→釈尊は自身の判断で。弟子の比丘たちには決まりを制定する。